# 参加記

専修大学社会知性開発研究センター/歴史学研究センター主催の第5回公開講座「フランス革命とアジア」が2007年6月30日に専修大学神田校舎で開催された。暑い中、150人余の聴講者が集まり、会場は盛況であった。冒頭で近江吉明センター代表による「フランス革命の理念がアジアにどのように影響し、理解されたのか」という公開講座の趣旨説明がなされたあと、加藤晴康氏、臼田雅之氏、田中正敬氏による講演が行われた。以下、3氏の講演について、簡単に言及することとする。

「日本の中のフランス革命―『草莽崛起』から『民権』へ」と題して行われた加藤氏の講演は、幕末から明治初期にかけて、フランス革命が日本にもたらした影響について、日本と周辺地域の事例を重ねながら、どのような形で革命が咀嚼されたかを概観したものであった。様々な形で伝わってきた革命情報により、変動する世界に目が向けられるようになるわけだが、日本での基本的なフランス革命への関心は軍事面を中心としたナポレオンへの興味であったこと。そして人権宣言にみられる「自由」という言葉は、小関三英の『那波列翁伝』で初めて日本に紹介され、「独立不羈」と訳されたこと。明治期の自由民権運動では新しい民の問題として、民のアイデンティティが問われるようになり、ここにフランス革命の意識が強く表れていることなどを指摘された。その中で加藤氏は日本の近代の道筋は、フランス革命と同時期に出現したものであり、革命の影響は日本のみならず周辺地域にも及び、その結果アジアでの秩序に動揺を至らしめたという。その上で、革命に揺り動かされた日本、アジアを日本史だけではなく、東洋史なども含め、世界史としてのフランス革命という定義で広く考察すべきであると指摘された。講演タイトルから一見、日本史的な話になるかと思いきや、アジアやヨーロッパを含めた大きな世界史としての位置づけをなす講演であった。

続けて行われた臼田氏の講演は、「フランス革命とベンガルの近代思想」と題し、「人権」や「自由」などを標榜したフランス革命の近代思想が、どのようにベンガルの近代思想に反映されたかについて言及された。フランス革命当時のベンガルは、革命に対して政治的にも社会的にも最も反応しにくい時期にあり、その影響は19世紀に入ってから思想面に反映され始める。「近代インドの父」といわれるラームモーハン・ローイの思想や作家タゴールの話などを用いて、その影響を紹介し、インドの近代思想に影響を及ぼしたフランス革命の思想はイギリス経由であり、様々な回路を通じて知識人に伝わっていったと指摘された。個人的な話になるが、講演冒頭で説明された「人権」の二面性に関する説明に、興味をそそられた。フランス革命で標榜された「人権」への理解に対し、フランスの植民地下にあったヴェトナムでは7月14日が『屈辱と不信の日』と受け止められていた。それは植民地下のインドでも同様であり、アジアでは人権概念が無色透明の普遍概念ではなかった。それらの点を踏まえ、フランス革命と当時のアジアの現状を平面で捉える必要性があると指摘された。この点より「人権」や「自由」といった言葉について、様々考えさせられてしまった。

3本目の田中氏の講演は、「植民地期朝鮮における『自由』と『平等』―関東大震災に対する反応から」と題し、これまで歴史学研究センターが実施してきた公開講座、シンポジウムの報告をもとに、日本と中国におけるフランス革命情報の理解のされ方を振り返り、近代朝鮮におけるフランス革命に関係する記述の特徴とは何か。また、革命において標榜された「平等」が植民地期朝鮮の中でどのように捉えられたのかを関東大震災時の朝鮮人虐殺を事例として講演された。フランス革命に関する記述の特徴としては、日本の植民地化への流れの中、保護国期には国家の危機という状況から強国への願望意識が見られ、植民地期になると独立運動がフランス革命になぞらえて説明された。その際、フランス革命を学ぶ場となったのは日本であり、インド同様、フランス革命の影響は支配側を経てなされたものであったと指摘する。「平等」という点については、朝鮮では植民地支配という枠組みを前提として、平等を求める動きがあったとし、朝鮮人と日本人の間でいわれる「平等」はあくまでも建て前に過ぎず、両者間の平等を確保する方法としては独立か対日協力という2つの方法しかなかったという。以上のことから、「平等」や「自由」といった言葉は個々の状況に規定されるものであり、当時の状況下における課題に対応するものであったと説明された。

以上、3本の講演について簡単に紹介したが、これらの講演より、各地域におけるフランス革命の理解のされ方について、興味深く拝聴させていただいた。やはり中でも植民地下にあったインドや朝鮮において、支配側を通して革命を理解するという点が興味深かった。今回の講座を拝聴し、私個人としては普段何気なく使い、また濫発的に使っている感がある「人権」、「自由」、「平等」といった言葉について、考えさせられた。状況や場所、立場が異なれば、一つの言説が持つ意味合いも当然ながら大きく異なるわけで、単純と思っていたことを改めて考えさせられる場となった。最後に蛇足的ながら、今回は日本、インド、朝鮮に関する講演であったが、中国近現代史を研究している筆者からみて、中華民国期、そして現在の中華人民共和国、台湾においては、どのようにフランス革命が評価されているのか、これまでのシンポジウムや公開講座でなされた議論などを踏まえつつ、自分なりに勉強してみたいと思った次第である。

小笠原　強
（専修大学社会知性開発センター/東アジア世界史研究センター任期制助手）